

第6章 アブドウルマリク・ブン・マルワーンのカリフ職時代とオマーン

研究者の元では隠し様もないことであるが、オマーンはオマル・ブン・アルハッターブ、神が彼を嘉し給わんことを、彼の時代以来、彼の後に来たカリフ達の手が伸びて来た事はない。つまりオスマーンそしてアリー・ブン・アビー・ターリブ、それからムアーウィーア・ブン・アビー・スフヤーン、そして彼の息子のヤジード・ブン・ムアーウィーアそしてその息子ムアーウィーア・ブン・ヤジード・ブン・ムアーウィーアそしてマルワーン・ブン・アルハカム等が続いた。そしてアルハカムは神の使徒（による）追放者であった。つまりこの6名の王達はオマーンにおいて、歴史が語る様な業績を持っていなかったのである。そしてオマーンは、彼等の日々において、オマーンの人々の手によって、イスラーム法が定めるように、オマーンの諸事を処理してきたのであった。

そして彼等は、真理の道筋から寸分も揺らぐことなく宗教義務によって行動した。そしてこの時期に、そこ（オマーン）の首長はアブド・ブン・アルジュラディーであった。そしてこの事はアブドウルマリクが彼の父の死後に忠誠を誓われ、そしてアルハッジージュ・ブン・ユーセフ・アッサクフィーがイラク総督に任じられるまでのことであり、アブド・ブン・アルジュラディーの2人の息子スライマーンとサイドの日々のことであった。つまりアルハッジージュ・ブン・ユーセフは、オマーンをイラク州に併合しようと試みた。するとオマーンの人々は、圧政者であり流血者であるアルハッジージュに服従する事（を良し）と見做さず、そうではなく、アルハッジージュの代わりに、アブドウルマリクの（直轄）州に（服従する事を良し）と見做していた。と言うのは、アブドウルマリクは人々の現状や彼等が望むことや、彼に対して求めることを洞察し、理解する理性的な人物であった。

一方アルハッジージュは、暴君であり、譴責する者であり、流血させる者であった。彼はその事を彼の個人的嗜好や彼の権力によって気にもしなかった。そしてオマーン側からの服従や従属がないと見ると、彼はそこへと軍を率いて来た。そして非常に激しい攻撃をそこに対してし続けて、殆どオマーンの人々を根絶やしにするばかりであった。しかし神は火中の黄金が豊かさの中で生きる事を望まれた。それどころかオマーンの人々にとって、彼との戦争が刃や堅牢さそして熱情の炎を増大させることとなった。つまり彼等は、彼の軍隊と戦う時はいつでも、彼の軍隊を殲滅し、そしてそれに敗北を強いたのであった。

イブン・ルザイクは彼の歴史書の中で言った。「騒乱が発生し、共同体が分裂した後、王権と権力はムアーウィーア・ブン・アビー・スフヤーンの元に帰した。ムアーウィヤにとって、オマーンには重要なものはなかった。この事は王権がアブドウルマリク・ブン・マルワーンに帰するまでであった。つまりアブドウルマリクはアルハッジージュ・ブン・ユーセフ・アッサクフィーをイラク総督に任じた。(P.185)そしてその事はその当時において、スルターン達の中の名君達の中に、オマーンにイバード・ブン・アブド・ブン・アルジュラディーの2人の息子スライマーンとサイドがオマーンにいた時期と合致する。そして2人はオマーンにおいて価値ある者達であった。

そしてアルハッジージュは彼等2人に対して侵略軍を送った。そして彼等2人に対抗して次々と首長を選出した。それはつまり軍の將軍達のことであった。そして彼等2人は彼の（軍の）集合体を解体し、そして多くの居留区で彼の軍隊を殲滅した。そして彼が彼等2人に対して軍を（イラクから）送り出す度に彼等2人はそれを打ち破った。そしてその多く（の者達）を捕虜とした。

そこで彼の側近の或る者が彼に、彼等 2 人に対してアルカーシム・ブン・シャウワ・アルマリーに大軍を授けて出発させては如何かと、進言した。と言う訳で彼は彼を彼等 2 人に対して差し向けた。そして彼は大軍つまり 5 軍団（前衛、後衛、左翼、右翼、本隊）を伴い多くの船で出発した。そして前述のアルカーシムがオマーンの海岸に辿り着いた時に、彼の船をハッターートの海岸に停泊させた。ハッターートは、クライアートの諸行政区を東部にみるワーディー・ブーシルを含んでいた。と言う訳でスライマーン・ブン・イバード・ブン・アブド・ブン・アルジュラディーはアズド族の勇者達と彼等と共にあるアラブ人達と共にそこへ向かった。

それから熾烈な戦いがあった。それから不運はアルハッジャージュの同志達の上にあった。彼等は最も酷い敗北を喫した。そしてアルカーシム・ブン・シャウワ將軍は戦死した。それから彼の一族の多くの者も戦死した。スレイマーンは彼等の多くを捕虜とした。言われている事には、彼等は彼等全てを滅ぼし、彼等の中の誰一人としても安寧であった者はいなかった。この様にイブン・ルザイクは言っており、また（20 世紀レバノン出身の知識人）シャキーブ・アルスラーン（の書物）にもある。

イブン・ルザイクは言った。「その事がアルハッジャージュに到達した時に、事態は彼を恐怖に陥れた。そして彼はこの出来事に驚愕した。この事（軍の派遣）は、かつて彼の元にオマーンをもたらすこと、卑しき者の導が彼にオマーンを連れて来ることを希望していたことであった。

それから殺害されたアルカーシムの兄弟であるマジャーアを招聘した。そして彼に人々を悲しませ、そして泣き叫ばせ、アンナザールの諸部族に対して彼等の恨みを晴らし、彼等の魂に火をつける事によって、糾合する事を命じた。それは彼が彼等（オマーンの人々）に対する彼の目的を果たす事と、そして彼の糾合が、普遍的な警告として彼等の同盟者達や人々の中の彼等の追隨者達にまで広がる事とそしてオマーンの破壊で彼等に勝利し、少なくともオマーンを従属させることであった」。

（イブン・ルザイクは）言った。「そしてアルハッジャージュは、オマーンが彼に対して踵を返した事に、それから諸地域で悪しき出来事が彼に起こっていることに対して、激情と怒りとそして侮蔑さえ表した。

そして彼はその事をアブドゥルマリク・ブン・マルワーンに書簡で報告した。アブドゥルマリクやこの事件の張本人であるアルハッジャージュは彼の敗戦に関して、そしてたとえ彼が勝利したとしても、アブドゥルマリクをして何と言わせたであろうか。

アルハッジャージュにとって、彼の満足や彼の欲望でアラブ人がアラブ人を打つのを見るという事に関して、何の気兼ねもなかった。もし彼が、(P.186)アラー・ブン・アビー・ターリブやハーリド・ブン・アルワリードやアムル・ブン・アルアースの様に、英雄の如く自ら戦場に突入していたならば、彼は自らの意図を自制していたであろう。しかし彼はそこにいなかった。

彼の政策としては、この軍隊における（オマーンの部族である）アズド族の存在を離脱から食い止めることであった。首長の力の源泉は共同体から生じるものであった。そしてバスラには、アズド族の英雄達がいて、彼等は何処から手を付ければ良いのかを知っていた。

アルハッジャージュが今回マジャーア・ブン・シュウーブ（誤植で、シャウワではないかと思われる）と共に、オマーンの人々を打つために送り出した軍隊の数は、イブン・ルザイクは言った。「より正しくは 40000 人であった。つまり軍は二手に分かれた。海路軍と陸路軍であった。個々の軍は 20000 人であった。そしてこの様軍は、戦争に関連した指導者達の見解においては、巨大なものであった。

そして既にこの軍隊に関して研究者達の幾多の出典が言及している。シャキーブは彼の解説の中でそれに関して言及していた。そしてマスカト国の詩人であるハッラーン・ブン・バドル・ブン・サイフやタイワーニー翁もアルミンハージュ誌の主幹であるアブー・イスハークも、アルバールーニー将軍やイマームのサーリミー、神が彼に慈悲を垂れ給え、彼もまたそれに関して言及した。この軍隊は、アラブの指導者達の間で有名であった。

イブン・ルザイクは言った。「陸路を行軍する者達は到着した。彼等は、我々が述べた様に、20000人であった。彼等の大部分は馬や他の動物に乗っていた」。(イブン・ルザイクは) 言った。「彼等とスレイマーン・ブン・イバードとアズド族や彼等以外のオマーンの人々の中で彼と共にした者達は、アルバルカア近郊の水辺で遭遇した」。現在オマーンの人々の元では、ここはワーディー・ブーシェルのファルジュ・アッシャーム村の東にあるアルバルカインとして知られている。明らかな事には、この水は彼の地ではかつて有名であり、家畜を連れて行く者が通っていた。そして恐らく彼等は競ってそこへ達しようとしていたのであろう。

この周辺の諸地域は現在殆ど近代化され。そしてとりわけ今世紀にはオマーンのファルジュ・アッシャーム村は特に新たになった。

イブン・ルザイクは言った。「彼等は前述の水辺で5回に亘り遭遇した」。もしくは3回とも言われている。(イブン・ルザイクは) 言った。「それは今日アルバルカインと言われている水である」。

私は言うておくが、アルバルカア近郊4日もしくは3日と推測される彼等の侵入が何処からのものであったか、私には分からない。

(イブン・ルザイクは) 言った。「彼等は激烈に戦った」。そしてアルハッジャージュの軍勢は敗北し、スレイマーン・ブン・イバードは彼等を求めてそして彼等を殲滅する為に攻撃した。その折彼は海路軍について何も知らなかった。(P.187)今彼は既に勝利し、刀は未だにその血で磨き終わっていなかった。そして心はその熱気が未だにおさまっていなかった」。すると海路軍がジャルフアール(現在のラース・アルハイマ)のアルユターナに下りて来た。そして現在の様に電報や飛行機ではなく、行きかう者達の口伝で情報が伝わって来た。そしてその軍はそこでタワーム(現在のアルブライミー)の人々の中の或る男と出会った。すると彼は彼等に、彼等の陸路軍とその末路、そしてスレイマーン・ブン・イバードは、彼自身と彼の軍隊が彼等の後を追っている事、そして現在は最低限の者達が彼と共にいる事を伝えた。

既に彼の部族は、戦争が既に終結し、その任務が終了したと思い、彼から離れてしまっていた。そして再度(軍勢が)来るまで時間を要した。その男(スレイマーン・ブン・イバード)は敗残兵を今ついばんでいた。彼は既に、この(彼の)軍隊がアルカーシム・ブン・シャウワに与えた決定的な勝利を喜んでいた。その時マジヤーア・ブン・シャウワがバルカーに到着した。即ちその軍隊は先ずジャルフアールで船を下りてから、理解していた様に、オマーンの海辺を行軍していた。それからバルカーへと、そこは海岸線におけるオマーンの重要な地域の一つであった。

スレイマーンの兄弟であるサイド・ブン・イバード・ブン・アブド・ブン・アルジュラディーがこの軍隊と対峙するために出撃した。それから彼等の間で日中を通して夜が彼等を引き離すまで、戦争の碾き臼を彼等は回した。彼等は非常に危機的状況にあった。つまり戦闘は激烈であったのだ。そして夜が彼等の間を引き離した後で、サイド・ブン・イバードは彼の軍勢を見渡した。すると彼の敵の軍勢に比する

と、それ（彼の軍）は黒い雄牛にある一本の白い髪の様であった。その意味は、彼は彼等を人数と装備において非常に少ない状態であると見て取った。特に彼等は未だに戦列を立ち去っていなかったのである。そしてもし彼が戦争を継続しようとするれば、彼等の家の周辺にいる彼等に戦争が忍び寄ってくるであろう。そして恐らくこの軍勢の背後に別の軍隊がいるのであろう。つまり何時まで我々はこの状況のままなのであろう。そして彼は不可能を感じ取り、そしてこの地域からの逃走を望んだ。それ（敵）が行動を起こさないことを願って。

と言うのは、勝利は神の御許から来るのである。そして彼（神）は最初に彼等を勝利させたのである。そして彼等は敵の多さに比すると少人数である。そしてもし彼が祖国における死を、彼以外の者（敵）から（付与される）生よりももし好んでいれば、それはより価値があるであろう。つまり死は避けられないのである。

しかしもし神が或る事象を望まれたのであれば、彼（神）の御許から様々な理由をそれ（事象）の為に現れてくるであろう。そしてもし首長（アブドゥルマリク）の決断が良ければ、（カリフより委任された）長官（アルハッジージュ）の館が崩れ、建物が壊れ、彼の玉座が揺れ、彼は倒れてしまうであろう。そしてこの様な事に対する目撃者は多いのである。

(P.188)私はそれ（首長の決断）に対して（擬人化して）言う、もし貴女がおくびをしたり、激怒したら、その場で神を称賛するか気を休めよ。

全体を見渡せば、サイド・ブン・イバードは事態の劣勢を見て取り、彼の祖国を守る事が不可能と明らかになった時に、即ち彼の民の中に戦死者の多さと負傷者の多さを見た時に、劣勢になった彼は、（戦いの）場に彼の英雄達や男達を彼の背後に残し、引き返して行った。この者は戦死し、あの者は負傷した。彼は自分の一党と彼の兄弟のスレイマーンの一党をまとめた。そしてアルアクダル山に彼等と共に上って行った。

イブン・ルザイクは言っている。「最も大きな山のことで、それはリヤーム族の山である」。またそれは最初の文字を「RU」と発音し、ルドワーンとも言われている。そしてサイド・ブン・イバード敗北と彼の男達から離れて彼が逃亡した状況が明らかになった時、その事が彼の敵を力付け、そして戦闘を活発化させた。そして彼の民を敵は軽視された。つまり敵を前にして彼等は見下げ果てた者達となり、敵は彼等を見くびった。即ち続げ様にサイドと彼の兄弟を攻撃したのであった。すると彼等2人は堅牢な山の上へと登っていった。

つまりオマーンの玉座、それを守る者は居なかったのであった。そして疑いなく、共同体は征服者に従属し、そして彼の方へと強制的に導かれるのである。それにもかかわらず、人々（敵）は山中にいる二人の首長サイドとスレイマーンを取り囲んでいた。つまり彼等2人の軍隊は征服者の手の下にあったのである。そして既に彼等（敵）はワーディー・ムスタッルで包囲大隊を作り、そして軍の残りは内陸に向った。つまり軍はニズワに入り、そこを占領した。そしてブフラーとアズカーへ（侵攻し）たが防衛する者を（敵軍は）見出さなかった。

つまりそれ（敵軍）には力と能力があったのである。そしてこの2人の指導者はオマーンからの逃亡を企てる他なかった。何故ならば、侵略軍がそこ（オマーン）奥深く侵攻して来たからであった。そして幾度となく害していた。つまり、軍が征服者になれば、オマーンの人々への復讐は避けられないのであった。

そしてマジャーアがマスカット近郊に彼の船団を係留したとの（情報）が2人指導者の耳に達した。そして恐らくその大部分はマスカットにいたのであろう。と言うのは、そこは唯一の係留地であるからであった。そして船団の数は大小合わせて300艘であった。即ち当時の船は現在のものとは違っていたからである。

スレイマーン・ブン・イバードはその係留地にいるそれ（船団）を攻撃した。そしてそれに火を付けた。しかし如何なるものによって、そして如何なる手段によってそれに火を付けたかは言及されていない。しかしそれが、彼が成した事であった。しかしながら歴史は、彼が50隻を越える船を炎上させた、そして残りの船は敗走し、攻撃者がそれ（船）を得ないようにと海へと逃れ、（P.189）そして船にいた人々はそこで船中で留まった、と明言している。

この間、マジャーアには、彼等がオマーンの内陸（ニズワ）にいる限り、スレイマーンとの戦争能力はないと思われた。そして或る日電撃的な攻撃を彼等に仕掛け、彼等を殲滅する必要があると思われた。

そしてイマーム・サーリミーの元における事件の調査でも同様であった。しかしながら、それ（上述の調査）の中には、スレイマーン・ブン・イバードがマジャーアとブルカーで激突した時に伴っていたアズド族の軍隊に関して多くの明白な事があった。それは騎馬兵が3000人であったこととその（軍勢の）内には更に3500人の人々がいた。つまりアズド族の軍勢の合計は6500名であった。そして彼等は20000人と交戦し、神の許しの下で彼等に打ち勝った。そして疑いなく彼等は祖国、子孫、家族を守ったのであった。

つまりマジャーアは夜も昼も行軍を続けた。そしてとうとうブルカーに到着した。そしてブルカーでの彼等とスレイマーンそしてサイドとの戦闘が言及されている。

その日が終わるとサイドは彼の軍隊を見つめた。既に彼等の中で殺害された者は殺害され（多数戦死し）、既にそれ（彼の軍が）僅かになってしまっていたと見做した。彼の心は恐れた。そしてその晩から彼は引き上げを開始し、そして彼の兄弟の一派と彼の一派の元へと向かった。それから彼はアクダル山へと彼等を伴って（戦場を）出て行ったのである。

（イブン・ルザイクは）言った。「つまり人々（敵軍）は彼を追いかけた」。つまり未だ彼等は包囲されていたのである。（イブン・ルザイクは）マジャーアの船団がマスカットの係留地で焼けた事件を言及した。そして述べた。それはマジャーアの船舶が焼けて、その残りが逃走した時の事であった。（イブン・ルザイクは）言った。「マジャーアは、マスカットの彼の船団を求めて内陸から出て来た。するとスレイマーンがマスカットから戻って来た。それから彼等2人はサマーイルで遭遇した。彼等2人の間で戦争の碾き臼が回り始めた。両陣営の中の高位の者達がこの衝突で殺害された。恐ろしい戦いであった。マジャーアが敗北して彼の船舶へと逃げ去った」。

つまり彼がマスカットに（敗走して）到着した時に、彼はスレイマーンが彼の背後にいる筈だと想像していた。つまり彼の元にあった究極の事（目的）は、恐ろしい事態の開始の前に急いで逃走する事であった。それから彼は船に乗り込み、ジィファールへと懸命に逃走した。

彼がそこで落ち着くと、アルハッジージュに、（戦闘が）生じた事と、惨劇の中で起きた事について書簡を送った。するとアルハッジージュは殊の外事態に関心を示した。オマーンから繰り返し彼の耳に到達する事に驚きながら苛立った。それから彼は別の軍隊を、アブドゥルラハマーン・ブン・スレイマーン

と彼の兄弟の中の側近の1人を指揮官として、陸路で送り出した。それは5000人から成る騎馬で、全員が大シリア地方の粗野な遊牧民であった。彼等は宗教も知らず、イスラームも気に止めなかった。無知は彼等の心を焼き払いそして悪魔がそれ（心）を占領し、心を支配した。(P.190)罪もなく、そして理由もなく、彼等の祖国でムスリムの人々と殺し合いをした。それどころか最も悲慘な性格で狡猾なアルハッジャー・ブジュ・ブン・ユーセフに従ったのである。

人々の中に、アズド族の男がいた。人々は彼の事を知らない。そのアズド族の者は彼の民族に対する峻烈さを聞き及び、人々の心を燃やした。つまり彼はチャンス見つけて、夜陰に紛れて軍隊を逃亡するまで、彼の心の中でそれを隠し、彼等の前でそれを見せることはなかった。恐らく彼は（志を）失うことがなかったのであろう。そして彼はとうとうオマーンにいるスレイマーンとサイドの処に来た。

しかし如何なる場所で彼等2人を彼が見出したかを私は見出せなかった。しかし彼は彼等2人に追い付き、彼の責務と侵略軍に関して彼が知っている事を打ち明けた。するとそれは彼等2人に影響を与え、彼の情報に2人は苛立ち、事態が2人を恐れさせた。たぶん彼等2人の恐れは、彼等2人を不安がらせるまでになったのであろう。そしてそれ（敵軍）が何もしないことを願い、彼等2人も自由人の（身分の）確定で（敵の手に落ちず）落ち着いている事を願ったであろう。名誉の死かもしくは（敵の）力の下での生か。そして正にそれは神の使徒、神が彼に祝福と平安を与え給わんことを、彼の時代にムスリム達を震撼させた事件に似ている。そしてそれに関して啓示が下った。「人々は彼等に言った。正に人々は既に汝達に対して（軍隊を）集めた」イムラーン家」第3章173節。そして彼等2人の信仰心が増えること、そして彼等2人が彼に「我々は来訪者を歓迎する」と言わんことを願うのである。そして正に我々がそれをもって戦う剣は我々の手中に（収まって）あることを。そして（イスラーム）初期の（信仰心の篤い）人々に我々がそれをもって会う心が、我々の胸の中にあらんことを。

そして彼等2人はアルバイダに向かう敵に集中した。しかし或る者達はその中で（諦めの）冷血が蠢き、その為に熱き血に影響を及ぼした。そしてたとえ彼（冷血漢）が彼等に、「この者達は小集団以外ではなく、そして彼等は食する者の1片のパン屑以外の何者でもなく、そして客人をもてなす為に剣を置き、そして死は喚声を発し、そして勇敢なる者は、彼の頭頂に恐れが冠される」と言っても、（それは）神、彼は裁定者達の中で最も良き御方であり、彼が彼等の間を裁かれる為の事であるが、（そう言っても）人々は成功したであろう。しかし人々は立たせる者（神）が彼等を立たせ、唯一人の者（神）がその言葉によって、彼等を座らせるのである。この様な事が、人間世界においてどれくらい生じたことであろうか。そしてこの種の人々に関する歴史がどのくらい起きたことであろうか。

イマーム（アッサーリミー）は言った。「彼等2人は不可能を感じ取り、それから2人は彼等の一党や人々そして彼等の民の中で彼等2人と共に逃れて来た者達を連れて行った。そして彼等2人は（アフリカ東岸の）ザンジバルの一つに到達した。即ちそこは2人がオマーンの事を耳にする事のない、そしてオマーンも彼等2人の事を耳にする事のない処であった。

そしてその時代以来、彼等2人が彼の地で死ぬに至るまで、彼等の拠点はザンジバルにあった。即ち彼等2人は、彼等の為に自分達の政府を作り、そして遠いそれらの地域でイスラームは広まっていったのである。そしてそこ（ザンジバル）はオマーンの人々の散開地になったのである。そしてオマーンの人々は(P.191)個々人でそして集団でその時代のあらゆる季節にザンジバルへと向かい始めたのである。

恐らく神が彼等 2 人によって、人々を正しい道へと導き、そしてそれらの地域で宗教を彼等 2 人によって広め、そこがイスラームに入信する事を望まれていたのかもしれない。

(イブン・ルザイクは) 言った。「マジャーアは、彼の同僚のアブドゥルラハマーンと共にオマーンに入った。それから二人はそこで世代を変えてしまう程 (1 世代を根絶やしにする) 行為を行った。そして彼等 2 人と彼等の占領軍はオマーンを略奪した」。そして疑いもなく無知は様々な試練の中の一つの試練である。アルハッジージェの高慢さは過剰さの更に上をいくものであった。そして彼等の元での宗教は、名付けられるに (値しない) 名目であった。そうでなければ、宗教が必要とするイスラームの諸権利は何処にあるのであろうか。(2017/4/7,P.191 まで)